特44
86

筑前琵琶
流

扇の的

宗家 橘旭翁先生校閲

大阪

完

265
109

絃中傳
意緒

明治
43. 6. 27
内交

己酉初夏

柳江題

扇の的

外園作

壽永の春の矢島潟　波風荒き衣更着や
十八日の日はたけて　潮に響きし矢叫も
木神に鳴りし太刀音も　軈てぞ絶ゆる敵味方
沖に連る兵船は　揚羽の蝶に紅の

旗靡す平家方　長汀曲浦の陸地には
九郎判官義經を　大將とする東猛者
笹龍膽を素絹に　染たる旗の幾ながれ
浦風冴えて吹きなびく　折もこそあれ徐々と
渚の方へ漕ぎよする　平家の船の唯一艘

舳に掲げし軍扇は　旭かたどる金の丸
見るも眩ゆき風情あり　陸にひかへし東軍は
大將始め訝かしみ　其も何事やなすらんと
船に眼を打ち注げば　いともめでたき上﨟の
檜扇颯と打ち廣げ　是れ射よがしに麾く

義經片頬に笑み給ひ　都の人の習ひとて
さしも優しき望みかな　味方の手鍛錬誰ならん
疾く射落せと下知の下　許多の人に推れつゝ
罷り出たる若武者の　年は二十歳をよも越へじ
其も此人や誰ならん　下野の國の住人にて

那須野太郎資高が一子　同苗與市宗高なり
大將近く座を與へ　彼れ射て見よと望まるゝ
身の面目は澤なれど　旭に弓を射向けんは
最とも畏こき業ならん　日の丸避けて矢を放ち
武運拙なく外れなば　身の榮辱は我知らず

源氏の軍の名折ぞと　思へば心定まらず
暫したゆたひ居しかども　一徹短慮の御大将
爭で許させ給ふべき　されば與市宗高は
已むなく御諚かしこみつ　逞しげなる黒馬に
金覆輪の鞍たいて　ゆらりと乗りは乗りしかど

是や生死の海ならん　兩軍固唾を呑みながら
眼を注ぎたる晴の場所　尚も過つ事あらば
其場を去らず死なんずと　一ト筋の矢に百年の
命をかける武士の意地　健氣の覺悟ぞ憫れなる
馬を汀に打せつゝ　矢頃量りて控ゆれば

時に夕陽かたむきて　日影浸せし海の面
黄金をたゝむ浦波を　立騒がする北の風
船諸共に軍扇の　或は低くまた高く
右に左にゆらめきて　定め難きぞ恨みなる
宗高馬上に目を閉て　心の裏に祈る様

南無や八幡大菩薩　別しては我國の神明
二荒權現那須野湯泉大明神　願はくばあの扇を射させて給へかし
これを射損ずるものならば　弓切折て自害して
人に再び面を向くべからず　今の與市を憫れとも
見たまふ慈悲のましまさば　此波風を打静め

暫しの守護を垂れ給へ　南無や八幡大菩薩
誠よりなる一心の　天に通じて自ら
風凪ぎ波も靜まりつ　射よげに見ゆる船の的
宗高心を押しゝづめ　矢を拔き取て打つがひ
命をしぼる右手左手　能く彎きかため氣を呑て
鏢と放てば鏑矢の　浦に響きて鳴く千鳥
羽ばたく隙もあらばこそ　覘ひ違はず扇轂を
發矢と射斷て矢は海に　扇は空にひるがへり
そよぐ嵐にひら〳〵と　花か紅葉か入り殘る
落暉を映て一トしほの　眺め榮ある有樣に

敵も味方も感に堪へ　舷たゝく一門に
箙を鳴らす源氏方　吶と揚たる鬨の聲
山に響きて海も湧く　しばしは鳴も止まざりし
夫かあらぬか今も猶ほ　矢島の浦を打つ波の
音諸共に宗高の　譽れきこゆる文の上。

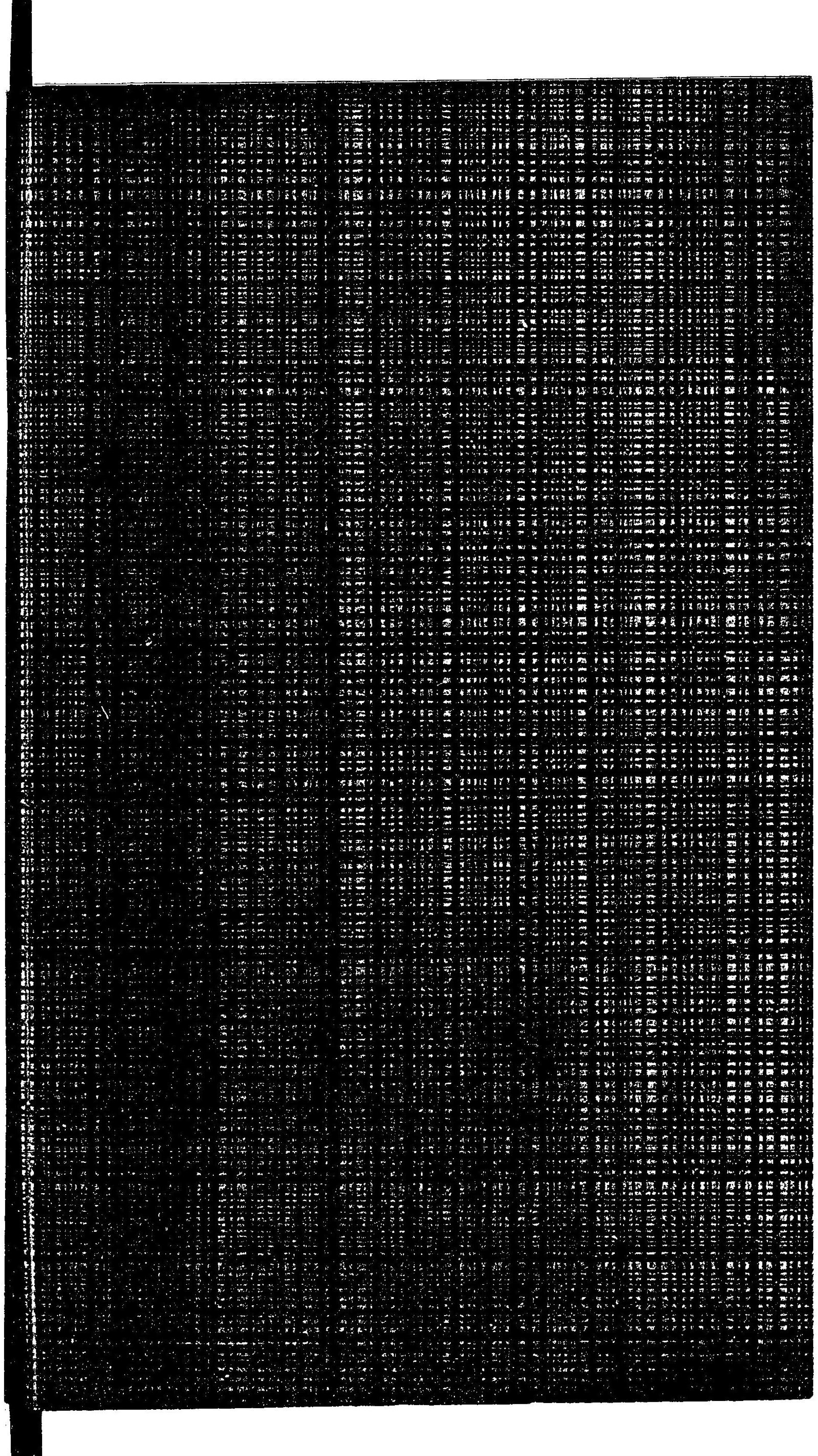
實にも千古の武名なり

神明幸納我祈願　予将射彼竿頭扇
水陸人馬簇如雲　萬目所注在一箭
舩動揺兮波帯風　正鵠難期命中功
一失恐作全軍辱　嗚呼神明鑒吾衷

明治四十三年六月十日印刷
全　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎

印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番

印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　電話東長二七〇番

265
109